

序 説

今回の「胃と腸」増大号は、2019年に発行された「消化管疾患の分類2019—使い方、使われ方」の改訂版として、最新の消化管疾患分類法を集約したものである。前回の増刊号は、「胃と腸」誌として初めて「消化管疾患の分類」に特化した企画であったが、消化管を専門とする臨床医や病理医にとって有用な情報を満載したものとして高く評価していただいた。今回は、その後の4年間に新たに提案された、あるいは改訂された分類を含め内容を大幅にブラッシュアップした、up-to-dateな情報を提供できたものと確信している。

さて、臨床医学においては診療ガイドラインに準じた診断・治療が基本と考えられている。ガイドライン作成の基本となるのはエビデンスに基づいた“分類”であり、“分類”と“診断”はほぼ同義語と考えられる。このように、理論的に構築された“分類”は医学における臨床・基礎研究の集大成と考えるのが妥当であろう。

一方、消化管疾患の形態学的分類を臨床の場で用いる際には、実際のX線造影所見・内視鏡所見、あるいは病理学的所見を提示して解説することが必須である。すなわち、“所見”、あるいは“用語”の実際を提示し、それらを平易に解説したうえで“分類”を説明することにより、各分類を正しく使用することが可能となる。したがって、今回の改訂版で

は、美しい画像とわかりやすい用語説明を各筆者にお願い申し上げた。すなわち、“用語辞典”としても本誌を役立てていただければと期待している。

従来、消化器病学における分類法とは、研究者が経験的に重要と考えた病理学的特徴やX線造影所見・内視鏡所見に着目し、その所見の有無や程度により簡潔かつ階層化されたカテゴリーに分化する作業により確立されてきた。さらに、有病率が高い疾患や腫瘍性病変の分類のうち、前向き試験やコホート研究で再現性が確認されたものは幅広く用いられている。しかし、今後は膨大なデータをAI解析することにより、たとえ同一疾患でも全く異なった分類法が提案されることが予測される。すなわち、将来的に消化管専門医のみならず、病理医(中でも治療病理専門医)の解析結果を超えた新分類法が提案される可能性がある。その際、現行の分類を熟知することは極めて重要であり、その意味でも本書が評価されることを期待している。

いずれにせよ、消化管領域における“分類学”は多くの研究者が多大な時間と労力を費やして確立したものである。最新の分類法をわかりやすくまとめた本誌を、分類のみならず消化管診断アトラスや用語辞典として臨床の場で使用していただければ幸甚である。

松本 主之